



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

復活したイエスは弟子たちの真ん中に立ってくださった

教皇聖ヨハネ・パウロ二世から「神のいつくしみの主日」と名付けられた復活節第二主日を迎えました。この日は「トマス」が最も目立つ福音朗読です。私もトマスに注目して説教をまとめてみましたが、今年は新しい気付きもありました。

朗読の中で、トマスが目立っていて見落としてしまう記述があります。それは 20 章 26 節です。「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

トマスも一緒にいたという家は、またもや「戸にはみな鍵がかけてあった」のです。八日前に、復活したイエスが弟子たちの集まる場所に現れ、「弟子たちは主を見て喜んだ」(20 節)はずでした。一週間も経たないのに、弟子たちが皆集まったその家の戸にはみな鍵がかけてあったというのです。弟子たちの喜びは何だったのでしょうか。

そうしてみると、出遅れた感のあるトマスでしたが、ほかの弟子たちとの差は大した差では無かったのかも知れません。先に復活の主と出会った弟子たちの心は、まだまだ弱いままだったのですから。この点は、30 年同じ聖書の箇所を読み返して、初めて気づいた点です。

実は私には、一緒に神学校に入学したけれども叙階が私より遅れた同級生が二人います。一人は長崎教区の司祭、一人は福岡教区の司祭です。私の中では、今の今まで、少し遅れたその同級生に、「私たちは先に司祭になった」という意識があったかも知れません。

事実としてはそうですが、今週の福音朗読と重ねて考えるとき、「叙階の日付が多少違っていても、その差は大した差ではなかった。ほんの少しでも優越感を持っていたとしたら、とんでもない勘違いだった」そう思い始めています。

トマスが頑なな態度を取ってその弱さを表しましたが、ほかの弟子たちも八日経ってご出現に立ち会うとき、家の戸には鍵をかけていた、そんな弱さの中にいました。誰も、自分が優れていると人に威張ることなどできません。トマスだけが弱い信仰を持っていたのではなく、すべての弟子が未熟な信仰しか持ち合わせていなかったのです。

皆、何かしらの弱さを持っていますが、復活したイエスは弱い私たちを強めるために、真ん中に立ってくださいます。朗読の中に二度とも描かれています。「イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた」(19 節 26 節)のです。

「真ん中」とはどの場所でしょうか。それは生活の真ん中ということ。自分のことで精一杯だったり、誰かを犠牲にして自分が成り立っていたり、さまざまな弱さがある。その生活の真ん中に復活したイエスが立って、私たちの信仰を強め、復活の証人にしてくださるのです。あとは私たちの生活の中心にイエスを迎えることができるように、場所を用意しておく必要があるのではないのでしょうか。